

勝呂氏は、評伝を書くに当たっては、

「麻布の石丸さん 幾度となく作品の中に登場させたいし、エッセイの中にもそのご恩を書いているわけですね。写真も新潮社から出ている文学アルバムから見る事が出来ます。でも、石丸さんがどういう方かエッセイを頼りにして、小説と言うよりは同じ事の繰り返しになりますが、人物像を頼ろうとしても、芹沢先生自身が信ずると言うことは、傍証が何もないということになってしまいますね。それでは研究者を名乗ると言うことは恥ずかしくて出来ないわけで、そこをどうやって埋めていくか評伝を仕事としていく上で要となる事柄です。」

具体的にどうしていくか、話しを進めていきました。「すぐその場にふさわしい妙案が浮かぶわけではない。ノロノロとゆっくり歩いていたり、他の調べものをしていてと交通事故のようにぶつかってみたりしていろいろなことがあってそこを埋めていきました。石丸氏の場合は静岡県立中央図書館の前で、ぼんやりと立っていたら、妙に分厚い本が目飛び込んできたそうです。それは紳士録だったそうです。目の前にあるのは、現在の紳士録でした。ここでふと思ったのですが、芹沢先生が書かれたものでは、東京で石丸さんといえば、氏族の出で、東京帝国大学を卒業され、日本郵船に勤めたキャリアがあり、海運業をやっている。そうするとこれだけの人が紳士録に出てこない筈がないと思うわけです。で、図書館で紳士録のストックがあるかなあと危ぶみながら静岡県立中央図書館では大正14年のものがあったのですね。それを借りだして開いてみましたらなんとお名前があるのではないですか。で、家族の名前まである。海運業と書かれている。そうすると石丸さんは疑いなく実在した。石丸さんは東京帝国大学の法学部政治学科を出られたのをちゃんと書かれている。全くエッセイに書かれていたことが事実、本当のところに基づいて書かれていたということが確認が取れていくのです。そうやっていくのが評伝を書く一つの柱になっていくのです。えーご本人がこう書いているからこうなんだと鵜呑みにすることが研究的な仕事ではありません。ご本人が言っている事の傍証を出来る限り取ってくる。これをどこまで鍛錬出来るかと言うところがある意味評伝の命に関わる場所ではないかなというところ。石丸さんが亡くなったのは昭和12年でしょうか」

ということになり、亡くなった事に言及していきます。そして、石丸氏という方は、「家族や親戚のなかでは、非難が強くなぜ小説家などという家業を選ぶのかなどという風当たりの中で石丸さんは、理解をしてくれた。この大の恩人である石丸さんが亡くなったわけだが、石丸さんはどういう出なのかはわかりましたけど、自分が書く場合はもうちょっと石丸像を彫り込まなければいけないだろうと考えた。こうなると資料がなんにもない。そこで手がかりは、芹沢先生の小説の中に石丸さんをモデルと思われる登場人物が短歌を作ったり俳句を作ったりして結社に属しているようだとこの事が出てくるのです。幾つか情報があり錯綜している」と石丸像に踏み込んでいくのです。

「例えば、戦前に改造社から『新万葉集』という万葉集の昭和版が出ました。かなり大きな企画です。で、石丸氏は『新万葉集』に作品を応募したような記述が小説の中にあるのですね。となれば『新万葉集』をあたって石丸助三郎の名前を見つけなければいけません。事は簡単に開かれそうに見えるわけです。新万葉集にあたりました。残念ながら作品に出てきません。それではどうするか、佐々木信綱に歌の指導を仰いだらしい、佐々木信綱さ

んの結社は「心の花」という結社です。で、「心の花」を所蔵している図書館はどこでしょうということ。ネットで全国の図書館を探すのです。「信綱文庫」というものが見つけましたのですが、でもこれを頼んだって、どいうんでしょうね、とてつもない砂丘で一粒の真珠を探すようなのでむやみな頼み方をしては駄目だと。もっと絞り込んで依頼をするにしても頼み込んで絞込んで依頼しなければ、はなからそんなふうな悠長なことをつきあってあげられませんという返事が返って来かねないわけですね。で、一計を案じまして、亡くなったのは昭和12年10月である。これは明らかである。そうすると亡くなるまで短歌を作っていたとすれば12年の10月前後の「心の花」だけ見ればいいわけですね。歌が出てくれば芹沢さんが書いていたのは間違いのない事実だということです。で、どこがこの本を持っているのだろうということでいろいろ調べてみたところ、東大の附属図書館にあったのですね。これも幸いに教え子が東大の大学院の博士課程にいまして日本近代文学を専攻しています。研究論文を書くのに忙しいわけなのですが手際よく調べてくれ昭和12年11月号に「心の花」の石丸助三郎が亡くなったという訃報記事がでていたのですね。だから間違いなく結社に入っていたのですね。あとは彼は訃報記事をつかめたついでにさかのぼっていくのです。数年分さかのぼっていくのです。昭和12年8月号に短歌が載っているのです。一つだけメモにしたものを読みます。中国です。中国に洞庭湖があります。洞庭の多き水枯れてあしむらたてり 寒き冬の後

石丸さんは、晩年、お年を召しても日本各地でなく海外まで旅に出ていることは、小説などでもよく気配としてわかってくるのですね。歌を見ると、中国が出てきたり、マニラが出来たりとか、海外に渡航したその土地を歌にしたことがわかりますので作品の中の石丸像は偽りのないことですね。で、そうした旅の姿を思うと、これはちょっと強引な結びつきになりますけど「人間の運命」の中に石丸をモデルにしている人物がヨーロッパに旅してくるといいうのもどこかに面影が通ってくるわけです。石丸像というのをつかまえることが出来たのです。昭和12年です。